

Vaiśeṣika-sūtra における「全体 (avayavin)」の概念

安 達 俊 英

1. はじめに

「全体 (avayavin)」の概念が Nyāya-Vaiśeṣika 学派の範疇論・存在論・認識論を特徴づける非常に重要な概念であることは周知の通りである。ただし、avayavin という語句自体は 4 世紀後半頃に成立した Nyāya-sūtra (NS) が初出であり¹⁾、それに先立つ Vaiśeṣika-sūtra (VS) には現れない。それ故にであろうか、VS には既に全体の概念が確立していると考えられるにもかかわらず、VS のどの部分にどのような形で全体の概念が反映しているのかについては、ほとんど先行研究がないといえる。そこで本稿において、以上の点を明らかにしてゆく。

2. 「全体 (avayavin)」の概念の特色

「全体 (avayavin)」の概念とは、質料因 (ex. 糸) が集積して結果 (ex. 布) を形成する場合、原因 (部分 avayava) とその集積である結果 (全体 avayavin) とは別の存在であると見なす考え方である。この全体の概念に基づくと、結果と原因は別物でありながら、同一空間を占めていることになる。このような関係を内属 (samavāya) と呼ぶ。そしてその内属関係にある「部分」は「全体」の内属因 (samavāyi-kāraṇa) になるとされる。これと同様、「部分」の属性 (guṇa) (ex. 糸の色) と「全体」の属性 (ex. 布の色) もやはり別の存在と見なされる。両者には当然、因果関係は存在するが、属性同士は直接には内属していないので、「部分」の属性は「全体」の属性の非内属因 (asamavāyi-kāraṇa) と称される。

さて、以上のような全体の概念の定義からすると、たとえ avayavin の語が見られなくとも、実体 (dravya) 同士の間に内属関係があることを前提とする sūtra は、全体の概念に基づいていることとなる。そのような sūtra を探し出すには、samavāya の語、及び実体の実体を有することを表現する dravyavat という語の使用が手掛かりとなる。ただし、両語とも実体と属性・運動との間の関係に用いら

(246) Vaiśeṣika-sūtra における「全体 (avayavin)」の概念 (安 達)

れる場合もあり、逆に両語を使用していなくとも、実質的に全体の概念に基づいているケースもあるので、注意が必要となる。

3. VS 第 1 章における「全体」の概念

さて、この全体の概念は、まず VS の哲学体系（特に範疇論）の根幹を説く VS1-1-7～16、即ち *dravya · guṇa · karman* の主要三範疇の共通性 (*sādharmya*)・別異性 (*vaidharmya*)、及び三範疇の定義 (*lakṣaṇa*) という重要な一段において、繰り返し現れる。

まず、共通性を説く VS1-1-7 では

VS1-1-7 *sad anityam dravyavat* (中略) *iti dravyaguṇakarmanām aviśeṣaḥ*.

存在すること、無常であること、実体を有すること、(中略) これらは実体・属性・運動〔の三範疇の間〕で区別がない (= 共通の特色である)。

と説かれる。ここでは属性・運動のみならず実体も *dravyavat* と理解できるから、先に述べたように、全体の概念を前提としていると言える。

それに続く別異性の一節 (VS1-1-8～10) でも全体の概念が見られる。

VS1-1-8 *dravyāṇi dravyāntaram ārabhante*.

複数の実体が他の実体を形成する。

VS1-1-9 *guṇās ca guṇāntaram*.

また〔実体の場合と同様に〕複数の属性が他の属性を〔形成する〕。

このうち、1-1-8 の「実体が他の実体を形成する」というのは、この表現だけからでは必ずしも全体の概念を前提していると確定はできないものの、直前の *sūtra* に全体の概念が見られること、更に注釈者の Candrānanda (CA) が *samavāyī-kāraṇāṇi dravyāṇi svātmavyatiriktam kāryadravyam ārabhante* (内属因となる複数の実体が〔集積して〕自身とは別の、結果としての実体を形成する) というように、全体の概念を現す際に特徴的な *samavāyī-kāraṇa* や *vyatirikta* の語を使用しつつ注釈していることからして、この *sūtra* も全体の概念に基づいていると見なすのが自然である²⁾。そうすると、それに続く 1-1-9 も当然、「*asamavāyī-kāraṇa* なる属性 (ex. 糸の色) が、結果としての実体 (ex. 布) に内属する結果としての属性 (ex. 布の色) を形成する」と解釈でき、やはりそこに全体の概念の反映が見て取れる。

また三範疇を定義する VS1-1-14～16 も全体の概念を前提としている。まずは実体の定義の *sūtra* から。

VS1-1-14 *kriyāvad guṇavat samavāyīkāraṇam* *iti dravyalakṣaṇam*.

Vaiśeṣika-sūtra における「全体 (avayavin)」の概念 (安 達) (247)

動作 (= 運動) を有し、属性を有し、内属因となるというのが実体の定義である。

“kriyāvad guṇavat” によって実体が運動・属性の基体になることが言明されているので、ここでいうところの内属因の「内属」とは、実体と運動・属性との内属より、むしろ実体同士の内属を意図している（少なくとも含んでいる）可能性が十分に考えられる。そうするとやはり全体の概念を反映していることになる。

続く 15 は属性 (guṇa), 16 は運動 (karman) の定義である。

VS1-1-15 ① dravyāśrayī ② agūṇavān ③ samyogavibhāgeṣv akāraṇam anapekṣa iti guṇalakṣaṇam.

VS1-1-16 ① ekadravyam ② agūṇam ③ samyogavibhāgeṣv anapekṣam kāraṇam iti karma-lakṣaṇam.

この定義に見られる 3 項目の内、①と②はおおよそ同様のことを述べているので、結局、両者の違いは③の部分にあるといえる。即ち結合 (samyoga)・分離 (vibhāga) において原因とならないのが属性、原因となるのが運動という定義である。ただし、VS7-2-10～11 に説かれる如く、結合・分離は運動に基づいて生ずる場合の他に、結合から結合が生じ (samyogaja-samyoga), 分離から分離が生ずる (vibhāgaja-vibhāga) 場合もある。普通、属性は結合・分離の原因とならないが、このケースのみ結合・分離の原因となりえるので、これを除かないと不完全な定義となってしまう。そこでその不都合を解消するために付加されたのが anapekṣa の語である。その詳細は既刊の拙稿³⁾に譲るが、このことから VS1-1-15～16 は samyogaja-samyoga, vibhāgaja-vibhāga の概念を前提としているといえる。

では、samyogaja-samyoga とはどのような概念かというならば、VS7-2-10 に対する CA の註に基づく、例えば、二本の指という因が合体して「二指体 (dvyaṅgula)」という果が生ずる場合、二本の指それぞれと虚空 (ākāśa) との結合が因となって、二指体と虚空との結合が生ずること、これが samyogaja-samyoga であると説明される。そうするとここには、二本の指とそれが合してできた「二指体」は別物であり、そこに存する虚空との「結合」も、相互に別存在であるという概念が存することになる。これはまさしく非内属因 (asamavāyi-kāraṇa) の関係を示すものといえる。よって samyogaja-samyoga には明らかに全体の概念が反映されていると言える。また、VS7-2-11 で説かれる vibhāgaja-vibhāga も、samyogaja-samyoga の対概念として同様のことが当てはまる。

そうすると、この samyogaja-samyoga, vibhāgaja-vibhāga の概念を前提とする VS1-1-15～16 も、まさに全体の概念に基づく sūtra ということになる。

(248) Vaiśeṣika-sūtra における「全体 (avayavin)」の概念 (安 達)

4. VS 第 1 章以外における「全体」の概念

以上, VS1-1-7~16 という, VS の哲学体系の根幹を成す sūtra 群において, 全体の概念が広く, かつ深く根付いていることを明かした. よって, 根幹部分で使われているなら, 当然, VS 第 1 章以外でも諸所に全体の概念が見られるはずである. 実際, かなりの sūtra において全体の概念が指摘できる.

まずは今あげた VS7-2-10~11 の saṃyogaja-saṃyoga, vibhāgaja-vibhāga の概念は全体の概念なしには成立し得ないものといえよう⁴⁾.

更に推論における正しい証相 (līṅga) を提示する VS3-1-8, 9-18 や, 語と対象の結合関係を論じる VS7-2-20 中の samavāyin の語も, 実体同士の内属関係を意図している (もしくはそれを含んでいる) 可能性が高い. 少なくとも注釈者の CA は角と牛, 手・足と身体という, 実体同士の内属をその例として挙げている.

この他, 「結果である」「原因である」という観念の発生原因に関する一節 (VS10-5~16) 中, 9・10・12・15・16 の 5 つの sūtra も, 断定はできないが, 全体の概念を前提としている可能性が考えられる⁵⁾.

5. VS 第 4 章の知覚条件における「全体」の概念

さて, 以上の他に, 実体と色に対する知覚 (upalabdhi) の条件を説く, 有名な VS4-1-6 および 4-1-9 も, 全体の概念を前提とする可能性が高い.

VS4-1-6 mahaty anekadravyavattvād rūpāc copalabdhiḥ.
大なる〔実体〕に対しては, 〔それが〕多なる実体を有することから, また〔そこに〕色〔が存すること〕から, 〔直接〕知覚が〔可能となる〕.

VS4-1-9 anekadravyeṇa dravyeṇa samavāyād rūpaviśeṣāc copalabdhiḥ.
多なる実体を有する実体との内属から, また色〔性〕という〔普遍かつ〕特殊から⁶⁾, 〔色に対する〕知覚がある.

4-1-6 では「大なる (単一の) 実体」が「多なる実体を有する」ことが述べられ, 4-1-9 でも「多なる実体を有する (一なる) 実体」という表現があるので, これらも全体の概念に基づく可能性が高いといえる. 確かに, CA の註を離れて sūtra の文言のみを頼りに解釈するならば, 「多なる実体を有する」ではなく, 単に「多なる実体から成る」という意味の可能性も否定できないが, それならば *anekadravya* という語を使用する必要はないはずである. というのも, 知覚条件としては「大なる実体」もしくは「大なる実体に内属」というだけで十分だから.

やはりここで *anekadravya* という語が用いられたのは, *dravya* は *anekadravyavat* か *adravyavat* かのいずれかで, 前者が知覚対象の必須条件であることを意識した表現であろうから, ここでの *anekadravyavat* や *anekadravya* なる *dravya* という文言は, 実体同士の内属を前提とした表現と見なす方が自然と言えよう。

ところで, VS4-1-6 の実体の知覚条件は, 認識対象が *avayava* の単なる集積ではなく, それとは別の *avayavin* でなくてはならないことを述べる NS2-1-35 を連想させる。明らかに両 *sūtra* の趣旨は近似しているといえる。ただし違いもある。VS の方はあくまで知覚の成立条件を述べる中で全体の概念が用いられているのに対し, NS においてはまさに認識対象としての「全体」が強く意識され, それが前面に押し出されているからである。よって, VS4-1-6 の延長線上に NS2-1-35 があるといえるが, 両者の間には未だ少し距離が存するように思われる。

6. まとめ

以上の検討を通して指摘できうる結論を以下にまとめる。

1. 実体・属性・運動という基本的三範疇の *sādharmya*・*vaidharmya* や *lakṣaṇa* を説く *sūtra* 群で全体の概念が繰り返し見られる故に, 全体の概念は VS 時点で既にその哲学体系の基盤を成していたといえる。
2. それ故, 当然のことであるが, VS 第 1, (2), 3, 4, 7, (9), 10 章という VS の全般に渡って全体の概念が見られ, 体系全般に影響を与えていることがわかる。
3. *asamavāyi-kāraṇa* の語こそ用いられていないが, *saṃyogaja-saṃyoga* 等の概念は *asamavāyi-kāraṇa* の概念を前提としており, よって VS 段階で既にかなり進んだ全体の概念が成立していたといえる。
4. ただし, VS における全体の概念は範疇論・存在論・因果論の領域で使用されるものであって, NS に見られる如き, 認識論における認識の対象としての全体の概念は, 未だ明確ではない⁷⁾。

1) NS2-1-31~36, NS4-2-4~15 といった, 認識対象の問題, およびその前提としての存在論を扱う一節で説かれる。なお, NS の成立年代は Karin Preisendanz, “The Production of Philosophical Literature in South Asia during the Pre-colonial Period (15th to 18th centuries): The Case of the Nyāyasūtra Commentarial Tradition,” *Journal of Indian Philosophy* 33 (2005) などに基づく。

2) なお, この VS1-1-8 は既に先学によって, VS に全体の概念が存在する例証として挙げられている。山上證道「印度正統論理学派における「全体」の概念」

(250) Vaiśeṣika-sūtra における「全体 (avayavin)」の概念 (安 達)

(『東方学』35, 1968)などを参照. 3) 安達俊英「Vaiśeṣikasūtra I. i. 15～16 について」(『印度学仏教学研究』33-2, 1985). 4) saṃyogaja-saṃyoga, vibhāgaja-vibhāga が、全体の概念を前提とすることは、既に Erich Frauwallner, *Geschichte der Indischen Philosophie*, Bd. 2 (Salzburg: Müller, 1956): 223, 225 や Dharmendra Nath Shastri, *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and Its Conflict with the Buddhist Dignāga School* (Delhi: Bharatiya Vidya Prakashan, 1964): 299～303 で指摘されている. 5) この他、風 (vāyu) が実体であることを証明する VS2-1-11 も間接的ながら全体の概念を前提としている可能性がある. 6) rūpaviśeṣa の解釈については、CA の註に基づいた. なお、VS4-1-6, 4-1-9 の解釈については、丸井浩「Vaiśeṣikasūtra 4.1.6 の研究」(『仏教文化』17, 1984)を参照のこと. 7) NS になって初めて avayavin の語が用いられるようになるのは、VS では samavāya や dravyavat という語で事足りた概念が、認識対象として論じられるようになった際、その対象を一語で明確に表す言葉が必要になったからではなかろうか.

〈略号〉

※ VS と NS の使用テキストは以下の通り.

VS: *Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda with the Commentary of Candrānanda*. GOS 136. Ed. Jambuvijayaji. Baroda: Oriental Institute, 1961.

NS: *Gautamīyanyāyadarśana with Bhāṣya of Vātsyāyana*. Ed. Anantalal Thakur. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997.

〈キーワード〉 Vaiśeṣika-sūtra, Nyāya-sūtra, 全体, 内属, saṃyogaja-saṃyoga

(公益財団法人中村元東方研究所連携研究員)